

---

# 幻獣観察物語～吸血鬼～

Douke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻獣観察物語～吸血鬼～

### 【Zコード】

Z8952Y

### 【作者名】

Douke

### 【あらすじ】

一人、森の中を歩く青年がいた。森の中には湖があり、小さな少女の姿があった……。

この作品は、『吸血鬼の噂話』を長編にリメイクした作品です。

## パート1

一人、森の中を歩く青年がいた。

年齢は若く、おおよそ二十代前半である。けれどその類には、青年には似合わない傷跡が深く刻まれていた。

格好はこれまた似合わないコートを着ており、頭にはベレー帽を被っていた。

そしてその手には、旅行用のトランクがあった。

青年の歩調はどこか焦っているかのように早足だった。

まだ日は高く、近くに獣のうなり声は聞こえないので、追われているというわけではない。

ただただ、森の中を早足で歩いていた。

その顔には、期待と興奮。

しばらく歩いていると、綺麗な湖があり、その近くに一人の少女が瑚の水を手ですくつて飲んでいた。

しかしその格好は少しおかしく、ネグリジェを着ていて、その上に黒いマントらしきものを身にまとわせていた。

「見つけた……！」

青年は少女の姿を見た途端、少女に向かつて走り出した。

足音に気付いて、少女は視線を瑚から青年へとゆっくり移した。

静かに立ち上ると、警戒しながら青年に尋ねる。

「……お主、何者じゃ？」

その少女に似合わない口調や雰囲気は、まるでビックな高貴の貴族のようだった。

少女の問いに答えず、青年は少女の元まで走ると、その場で荒れた息を整える。

ゆっくりと深呼吸をし、少女に向き合った。

「僕はマルク・ヴァンプール。ただの旅人さ」

「……なるほど。旅人であつたか。しかしこの先にはただ森が広が

つてあり、森を抜ければただ山があるのみじゃ。戻つて別の所を旅するがよいぞ」

「いや、僕の旅にはきちんととした目的があつてね。今ここにいる君に聞きたい事があるんだ」

「愚かな人間に答える口は持たぬが、特別に答えてやる。」  
愚かな人間と聞いた瞬間、青年は確信した。  
けれどそれを確認するかのように、青年は少女に尋ねた。

「君は……魔女かい？」

## パート2

この世の中、人にはあらずものは忌み嫌われていた。それらは全て『化け物』などの一言にまとめられ、住処を奪い、殺していた。

たとえそれが、人間にとつて友好的なものであつても だ。  
しかし、今でも人間に見つからないようにひつそりと生き続けている。

そして化け物の基準も大きく変わっていた。

人にはあらずものだけではなく、人間という道から外れた人間も忌み嫌われるようになってしまった。

例えば魔女。

人に害するものを作り、時に妖しげな言葉を使う。  
そう思われるだけで、処刑された人は数多くいる。  
マルクはそういう『化け物』といったものを探し、旅をしている。  
そして先日泊まつた村にて、近くの森に魔女が住んでいるという噂を聞き、その噂が事実かどうかを確かめるため、向かつたのだが

「お主は馬鹿か？」  
マルクの期待は、少女のその一言であっさりと打ち砕かれた。  
「今どき魔女など馬鹿馬鹿しい。お主は子供か？」  
「へ……？ つ、つまり君は魔女じゃないの！？」  
「そう言つておるじやろ？」「  
そんな……、と言いながら手に持つていた旅行用のトランクを地面に落とした。

けれどすぐにマルクは立ち直った。

「……まあ、噂つてのは大体がデマだしね。こういう事もあるよな。ちなみにこの辺りに君の他に人はいる？」「

「」の辺りは我を恐れてか、人どこのか獸もつるつかんぞ」「だよな……」

ふと、そこで少女の言つている事が少しおかしい事に気付く。  
「……君を恐れて？ 魔女じゃないんだから、どこからどう見ても  
ただの少女にしか見えないけど……」

すると少女は無い胸を張り、急に威張りだした。

「ふふん。我が誰だか知りたいか？」

「そりや、こんな所に君みたいな少女が、そんな変な格好をしてい  
るつてのは疑問に思うけど」

「へ、変じやとー？ お主の方がよっぽど変な格好じゃ！ 特にそ  
のベレー帽！」

「なつ！？ 確かに格好が変なのは自覚してるけど、ベレー帽を悪  
く言つたな！ それを言うなら君のそのマントだつて似合つてないよ  
！」

「き、貴様……！」

すると、肩を震わせながら少女の体が宙に浮き始めた。

「へ……？」

「ふ、ふふ……。我を怒らせたな？ 」の我を怒らせたら、どうな  
るかその身に刻ませてやる！」

そして爪を立て、その小さな体をマルクに向かつて飛翔した！

「我が名はミネル・スカーレット！ そして 吸血鬼じゃ！」

あと数センチで、マルクにその爪が届くところ……。

「ぎゃっ！」

丁度、木々の隙間から差し込む日差しが少女の顔に当たり、爪で  
はなくそのままマルクに体当たりするような形になってしまった。  
それをマルクはもろに喰らい、一人で抱き合つよつた感じに巨樹  
に当たるまで転がった。

「ふ、ふにゅ～……」

「魔女じゃなくて、吸血鬼だったのか……」

止まるさうに、思いつき頭をぶつけたマルクだったが、そんな

事を気にも留めないで氣絶しているミネルを見ていた。

このままじっくりと観察したい。だけぞれだとただの観察だ。

僕がしなくちゃいけないのは、生態観察なんだから。

そう思いながら、マルクはミネルをおぶりトランクを左手に持つて、森の奥に進んだ。

## マルク・ヴァンプールの第十三回のレポート

今回も、なんとか幻獣の一種である存在に出会える事が出来た。出会った幻獣は、なんとあの人の血を吸うことで有名な吸血鬼だ。

出会いがしらに空を飛んで襲われるという、とても不思議かつ貴重な体験をしたが、はたして本当に吸血鬼は人の血を吸うのか？そしてどれほどの脅威があるのか？

前回同様に、その事について調べていきたいと思う。

さて、初めての方もいると思うので、まず幻獣というのがなんか。まずはそこから説明していこう。

幻獣とは文字通り、幻とされる獣。

そのまま読めばそうなるが、この本の中では少し意味が異なつている事に気をつけて欲しい。

僕の中の幻獣とは、人間から嫌われ、恐怖を『えさせ、それにより人間の手によって住処を奪われ殺されてしまった存在の事を指す。なるほど。こう書いてしまうと、ただただ幻獣というのは『いてはいけない存在』と思ってしまうだろう。

だがそれは違うと、僕は考える。

確かに中には凶暴で、恐ろしい存在もいるだろう。だけれど中には人間と友好的な存在もいるだろう。

もちろんこれは僕の勝手な思考だ。ほとんどの人がそうは思えないだろう。

しかし、僕はこれまでそういう存在と関わってきた。もし凶暴な存在しかいなければ、今まで僕は本を出す事が出来なかつたであろう。

信じるか信じないかは、もちろん自由だ。でもこれだけは分かつて欲しい。

たとえ忌み嫌われる存在だとしても、きちんと手を取り合えば共に歩む事が出来るのだと。

それでは、今回出会った吸血鬼の特徴について説明しておこう。ちなみに今その吸血鬼は、田舎に当たってしまったからか気絶してしまい、偶然見つけた小屋のベットの上に寝かせている。外見は八、十歳くらいの少女。ロングヘアの金髪でとても可愛らしいブローチを着けている。中身を見てみたいところだが、勝手に見てしまうのは人としていけない行為なので、我慢する事にしている。格好は白いネグリジェの上に何故か黒いマントを羽織つていた。

襲い掛かってきた時はどうしようかと思ったが、こうして見てみると、ただの幼い少女が眠っているだけだ。

だが話し方がかなり少女にしては独特で、まるで貴族の令嬢みたいな話し方だった。もしかすると、この吸血鬼は前は人間で、他の吸血鬼に噛まれて自身も吸血鬼になつたかもしれない。

ともあれこれは仮定なので、眞実は分からぬがこれからこの吸血鬼について調べていきたいと思つ。

## パート3

田を覚ましたミネルは、いまいる場所がどこだか咄嗟には分からなかつた。

「こ、ここは……」

次第にここが自分の暮らしている小屋だと分かつた。

けれど、いつの間に戻ってきたのだろうか？ 確か湖の水を飲んでいたら、変な人間がやってきて……。

そこまでは覚えているが、どうしてもその先が思い出せない。頭だけを動かすと、そこにはテーブルでうたた寝しているマルクの姿があつた。

自分がベッドについて人間がここにいるという事は、また日光に当たつて氣絶してしまつたのだろうか。だとしたら、記憶が無いのも納得できる。

体を起こしてマルクの方に近づくと、どうやらマルクは、何かを紙に書いている最中に寝てしまつたようだつた。

ミネルが何を書いていたか見るために、紙を取りうつとすると……。

「……ん、あれ、起きたんだ」

ミネルが近づいてきた氣配に気付いたのか、いきなりマルクが目を見ました。

「お、お主……何故ここにあるー？」

驚いたミネルは、どうしてマルクが小屋にいるのかを、少し戸惑いながら尋ねた。

「ふわ……ああいや、ごめん。いきなり君が気絶したから、とりあえず横になりそうなところを探していたら、この小屋を運よく見つけた。近くの村に戻るうかと思つたんだけど、吸血鬼の君を連れて行けないだる」

「ここには我家じや！ オ主はさつさと出て行け！」

「君の？ ああ、だからこんなに整つてゐるのか

マルクはミネルの言葉を無視して、小屋の中を見渡した。

小屋の中には本棚や暖炉、他にも服をしまうタンスなどといった、人間の生活に最低限必要な家具があった。本が散らかっているなどとこう事は無く、埃はひとつも落ちていない。

ただ、ひとつ。マルクは気になることがあった。

「……でもなんで、こんなところに木こりの斧が？」

これだけ整つた環境に、なぜか入り口の横に斧がぽつんと置かれていた。

ミネルはマルクの質問に答える。

「ふん。ここは元々木こりの家みたいでの。長らく誰も使用しておらんかつたから、我が有効活用させてもらつてあるだけじゃ」

「なるほど。だから吸血鬼だけじゃなく、普通の人でも暮らしきれる環境なんだな」

「……お主、いつたいどういうつもりなのじや」

マルクは質問の意味が分からず、問い返した。

「どういっつもりつて？」

「我の正体を知つたにも関わらず、何故逃げぬ？　何故怯えぬ？　何故殺そうとしない？」

「おいおい殺すだなんて。吸血鬼なんて貴重な存在、殺すなんてもつたひないだろ」

マルクとしては真面目に答えたつもりだが、ミネルにとつては逆に不審感が強まるだけだった。

そしてさらに、マルクは言った。

「そんなことより、僕もしばらくここに住み着いていいかな？」

「はあ……？　お主、なにを訳の分からんことを言っておる？」

「だつて、すでに全滅したはずの吸血鬼が目の前にいるんだ。こんな貴重な存在観察しないわけにはいかないだろ！」

「観察……？　お主はただの旅人であろう？　何故我を殺さずに觀察するのだ？」

「本にして売り出す！」

## パート4

マルクの目はまるで子供のように輝いていて、どこか固い決意が秘められていた。

今の世の中、本を書くという職業は稀であった。

そもそも本を読むこと 자체が少ないのだ。それゆえに本を出したとしても、売れず、すぐに別の職業をする事が目に見えている。だが、やはり売れる人はいる。当たれば一躍有名になり、大金を手に入れる事が出来る、まさに賭博のようなものだ。

「そしていつかは、全世界に僕の本を広めて」

「なるほど。つまりお主はこう言いたいのだな？」

マルクの話を遮り、冷たい口調でミネルは言った。

「自分の利益の為に、我という存在を観察すると」

「それはちょっと違うかな。確かに僕は旅をする為に利益は欲しいさ。でも僕の場合は……」

「たとえ違つたとしても、我にとつては自分という存在を勝手に売られる事実は変わらぬ！」

ミネルは、自分でも知らない内に怒鳴っていた。そしてそれは、止まらずにどんどんあふれ出していく。

「分かるか人間、自分の存在が他人に売られるのを！ 勝手に買われていくのを！ 分からぬだろうな。何故ならお主は人間、私は吸血鬼だからじゃ！ 存在自体が違う！ なにもかも！ だから私は人間と関わるのをやめたのじゃ！ それなのに、そんな我をお主が觀察するじゃと？ ふざけるのも大概にしろ！ 我の…… 我の気持ちも知らずに！」

そして小屋の出口である扉を指差し、

「ここから出て行け！ さもなければ……殺すぞ！」

あまりにもミネルの剣幕に押され、マルクは大人しく従つた。

「わ、分かった。この小屋からは出て行くよ」

急いでテーブルの上に広げていた紙やペンをトランクにしまい込み、逃げるかのようにマルクは小屋を出て行った。  
出て行つたのを確認したミネルは、ふらふらとベットに倒れこんだ。

言つてしまつた。

決して口にはしないと、決めていたのに。

あんな簡単に『殺す』なんて、言つてしまつた。

「……母上、父上」

今は亡き存在を、ミネルは泣きながら呟いた。

「……しつつたな。『うなるとは思わなかつた』

小屋を出て行つたマルクは、その近くにある樹木を背もたれにして、座り込んでいた。

「でも、諦めるつもりは無いからな」

まるで自分に言いつけるよう。あるいは怒りせてしまつた吸血鬼に向けて。

「これは僕じゃなくて、君みたいな存在を救うために、やつていることなんだから。それが達成されるまで、僕は諦めないし、絶対にくじけたりしない。だってこれは……」

僕の罪の償いでもあるんだから。

最後の一言を、マルクは口にはせずに心の中で呟く。

その後マルクは野宿するために、道具を広げ小枝を集め始めた。

## パート5

その夜。

マルクは焚き火のわずかな明かりで、本を読んでいる時だつた。少し離れたところから、微かに音が聞こえた。

「…………？」

まさか狼が？ そう思ったが、ミネルは自分の事を恐れて人どころか獸すら近づかないと言つていたのを思い出し、マルクはすぐに別の可能性を考えた。

とりあえず荷物をまとめ、焚き火を消さないまま隠れる事にした。樹木の陰に隠れていると、音は小さいが徐々に近づいてくるのがわかる。音とその間隔からして、どうやら人のようだ。しかも一人ではなく、複数。

森の中なので顔はよく見えないが、焚き火のおかげでシルエットだけは見ることが出来た。

数は三人。どちらも体は大きい巨体で、その手には農作業で使われる鍬くわや斧のこが。おそらく近くの村にいる男達だらう。

（やつぱり、目的はある子か）

マルクの推測では、魔女と噂されているあの子を捕まえに来たと考えている。

ただでさえ忌み嫌われている存在だ。討伐、あるいは捕獲しようとするのは、もはや当たり前の行動だ。

「…………でも、そうされると困るんだよな」

マルクはトランクから果物ナイフを取り出した。

男達は小屋の中に入ると、ミネルはベッドの上で寝ているところだつた。それを確認すると、急いで手と足を縄で縛り、喋れないよう口も縄で縛ろうとした。その時、ミネルが目を覚ました。

「な、なんじゃお主らー！？」

「おい、田を覚ましやがった！」

「急いで口を縛れ！」

必死に抵抗しようとしたが、さすがに男達の腕力には歯が立たず、すぐに拘束されてしまった。

「むー！ むー！」

「へ、へへ……。安心しな、魔女。俺たちはお前を殺しに来たんじやない」

「悪いが、俺たちの生活の為になつてもらあつ」

それを聞いた瞬間、ミネルは全てを悟つた。

自分はどこかの貴族か王に売られるのだと。

いままでは、誰かが小屋に入ろうとする前に気付き、木こりの斧を使って追い出してきた。が、疲れていたせいで反応が遅れてしまつた。

このまま売られてしまつても、いざれ殺されてしまうだけ。

ミネルにとつて、それは一番いやな事だつた。

「むー！」

「こいつ、おとなしくしゃがれ！」

たとえ縛られたとしても、ミネルは体を無理矢理に動かして、なんとかして逃げようとした。

しかし、所詮は少女の体。あつせりと抱えあげられてしまつ。

「よし、このまま……」

「村に戻つて売ろう、とか考えないでくれよ」

小屋から出ようとした男達の前に立ちふさがつたのは、マルクだつた。

男達は突然の乱入者に驚いたが、一番驚いたのはミネルだった。

「むー！？（な、何故お主がここにー？）」

「ゴメン、約束を破つて。でもこの状況じゃ、そんな事言つてる暇じゃないだろ？」

「だ、誰だお前！ こいつは俺たちの獲物だ！」

「おいおい。僕は別に奪いに来たとか、そういうのじゃないさ。で

も、その子を攫うのは勘弁して欲しいんだ」

体つきからして、人数からして圧倒的に男達が勝っているのに対し、マルクは至って冷静だつた。

「だってその子は、僕の大事な友人になる予定なんだから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8952y/>

幻獣観察物語～吸血鬼～

2011年12月1日20時53分発行